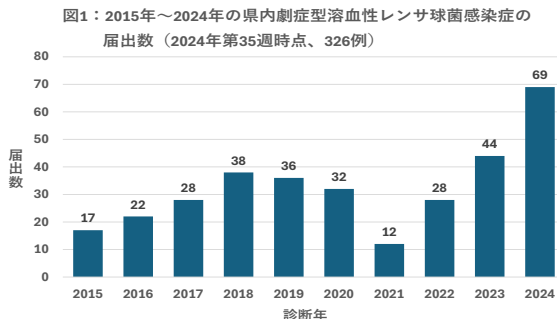


【今週の注目疾患】

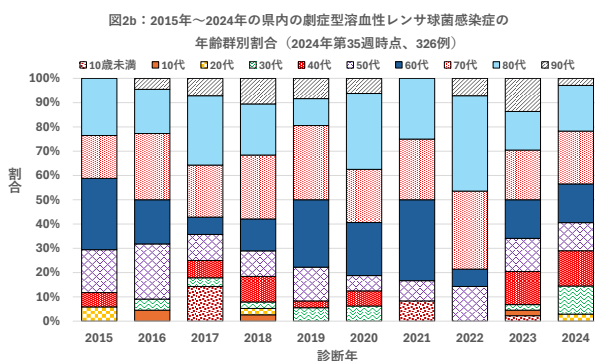
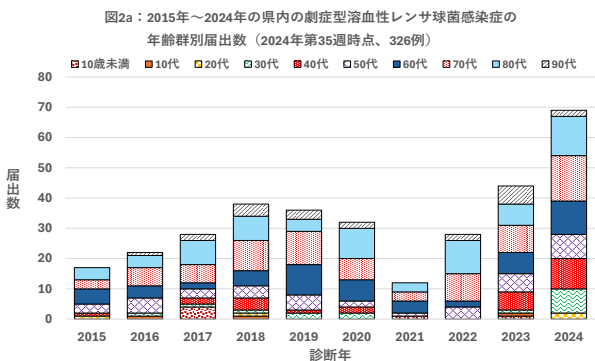
《劇症型溶血性レンサ球菌感染症》

2024年第35週に県内医療機関から届出が2例あり、2024年の累計届出数は69例となった。2015年以降の直近10年で最も多い届出数であった昨年2023年の年間累計届出数44例を、本年は現時点において既に超えている（図1）。



2024年に届出のあった69例については、以下のとおりであった。

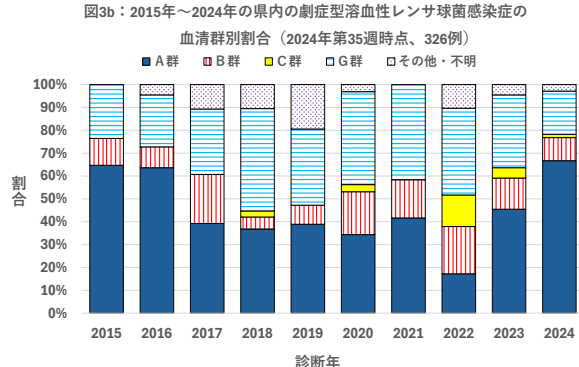
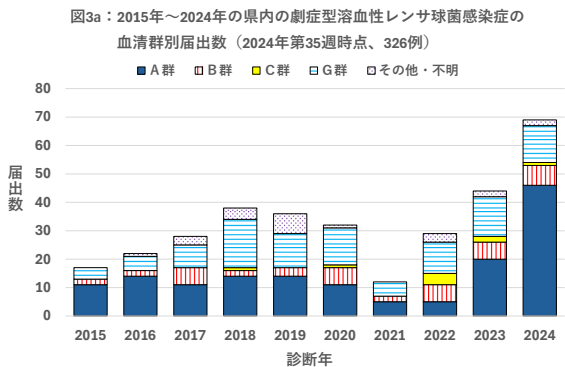
性別は男性42例（61%）、女性27例（39%）であった。年代別では70代及び80歳以上が各15例（22%）と最も多く、次いで60代が11例（16%）、40代が10例（14%）であった（図2）。



推定された感染原因・感染経路（重複あり）のうち、最も多く記載があったのは創傷感染で29例であった。

届出時点における死亡の報告は22例（死亡割合：32%）であり、22例中男性が15例、女性が7例で、年齢中央値は73歳（範囲29歳～96歳）であった。

血清群別ではA群が46例（67%）で最も多く、次いでG群が13例（19%）、B群が7例（10%）、C群が1例（1%）、その他・不明が2例（3%）であった（図3）。届出全体のうちA群が占める割合は、2016年以降減少傾向にあったが、2023年以降増加に転じた。



劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、β溶血を示すレンサ球菌を原因とし、突発的に発症して急激に進行する敗血症性ショック病態である。初期症状としては四肢の疼痛、腫脹、発熱、血圧低下などで、発病から病状の進行が非常に急激で、発病後数十時間以内には軟部組織壊死、急性腎不全、急性呼吸窮迫症候群（ARDS）、播種性血管内凝固症候群（DIC）、多臓器不全（MOF）を引き起こし、ショック状態から死に至ることも多い¹⁾。その致命率は約30%に及ぶとされる²⁾。

原因菌には、A群、B群、C群、G群レンサ球菌が主なものとして知られている²⁾。

全国的に劇症型溶血性レンサ球菌感染症の届出数が増加している理由は必ずしも明らかではないが、2023年の夏以降、主な原因菌とされるA群溶血性レンサ球菌による急性咽頭炎の患者数が増加していることが要因の一つである可能性があると考えられている²⁾。なお、A群溶血性レンサ球菌では、日常よくみられる症状として、急性咽頭炎の他、膿痂疹、蜂窩織炎、猩紅熱があり、これら以外にも中耳炎、肺炎、化膿性関節炎、骨髓炎、髄膜炎などを引き起こすことがある³⁾。

以下、厚生労働省ホームページのQ&Aから引用²⁾

Q 日常生活ではどのようなことに気をつけたら良いのですか？

A 劇症型溶血性レンサ球菌感染症に限らず、多くの感染症の予防には、手指衛生や咳エチケット、傷口の清潔な処置といった、基本的な感染防止対策が有効です。

また、発熱や咳や全身倦怠感などで食事が取れないなどの体調が悪いときは、かかりつけの医療機関などを受診しましょう。

「すぐに病院に行った方がよいか」や「救急車を呼ぶべきか」悩んだりためらうときに、医師・看護師等の専門家からアドバイスを受けることができる救急安心センター事業【#7119】に電話相談しましょう²⁾。

■参考・引用

1)国立感染症研究所：劇症型溶血性レンサ球菌感染症とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/341-stss.html>

2)厚生労働省：劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS）

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137555_00003.html

3)国立感染症研究所：A群溶血性レンサ球菌咽頭炎とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/kansennohanashi/340-group-a-streptococcus-intro.html>